

■ 試験研究課題 中間評価結果（令和6年度評価分）

判定基準 A：実施妥当、B：内容に改善が必要、C：実施不適當

機関名：上場営農センター

課題名	研究目的・目標	期待される成果	研究期間	総合判定
露地ミカンにおける S. マルチ栽培等を活用した省力・省資源型栽培体系の構築	上場地域特有の土壌条件に対応した S. マルチ栽培技術に、堆肥や肥効調節型肥料等を用いた施肥技術や隔年交互結実栽培技術を組み入れた、環境負荷に配慮した省力で生産性の高い栽培体系を構築する。 ・ 生育ステージに応じた水管理技術の確立 ・ 省力・省資源型肥培管理技術の確立	・ 露地温州ミカンの高品質安定生産につながり、農家の所得向上や販売額増加に貢献する。 ・ 環境負荷軽減や堆肥などの地域資源の有効活用につながる。	令和7 ～ 9年度	A

機関名：農業試験研究センター

課題名	研究目的・目標	得られた成果	研究期間	総合判定
国内外で支持される競争力ある高品質イチゴ新品種の育成	イチゴ主産県として生産維持が図られ、国内外の市場で支持される高品質・高収量・栽培適応性に優れたオリジナル品種を開発する。 11月下旬から収穫可能な早生で、良食味で輸送性に優れた、多収品種の開発	これまでに、早生性で果実品質や収量性等が優れる2系統を3次選抜した。	平成 29 ～ 令和 8 年 度	A
消費者に選ばれる高品質ブランドイチゴ「いちごさん」の生産・流通技術の確立	「いちごさん」の果実品質向上・安定生産技術及び輸送性向上技術を確立する。 - 試験場の商品果率 90%以上 - 病虫害被害率 5%未満 - 輸送性を向上させる包装方法・栽培条件の指標作成 11月～6月の10aあたり8t	- 花芽分化確認後に施肥を行うと、先青果の発生数が増加し、果実品質が低下した。 - 台風前と後の薬剤防除では、台風前の防除効果が高いことを確認した。 - 摘葉はせずに摘花を行い、着果負担がかからないような場合には、輸送時の果実損傷の達観値が小さくなった。	令和 4 ～ 8 年度	A
省力的な IPM を実現する水稲病虫害予報技術の開発	水稲病虫害に対する発生予測モデルを新たに開発し、防除の効率化を図る。 - 水稲病虫害 17 種の発生予測システムの開発 - 農業データ連携基盤 WAGRI への WebAPI の搭載	イネ縞葉枯病を媒介するヒメトビウンカにおいて、発生予測モデルによる発生時期と薬剤散布時期の予測誤差は 0.5～3 日であり、システムの適合性は高かった。	令和 4 ～ 8 年度	A

課題名	研究目的・目標	得られた成果	研究期間	総合判定
良食味・高付加価値なオリジナルカンキツ品種の育成	年内から初夏にかけて幅広い時期に出荷可能なカンキツ品種を育成する。 また、機能性や芳香性に優れたカンキツを育成する。 ・ カンキツ需要期に出荷可能な良食味・外観美麗な品種の育成また、端境期の初夏まで出荷可能な晩生系・文旦系品種の育成 ・ 機能性や芳香性など高付加価値を有した香酸カンキツ品種の育成	・ 年内から年明けに出荷可能な品種については10系統を一次選抜しており、このうち2系統については無加温ハウス栽培下で小玉傾向ではあるが、糖度が高く、良食味であった。 ・ 初夏まで出荷可能な品種については8系統を一次選抜しており、このうち1系統は1月に収穫し、3月下旬まで貯蔵すると糖度が15度程度、クエン酸含量は1.3%と糖度が高く、良食味であった。 ・ 「佐系72」は、3月に糖度が14～15度程度、クエン酸含量が1.2%程度になり、食味は‘甘夏’同様の風味と苦味を持つ系統である。現在、二次選抜試験を実施中である。 ・ 機能性成分高含有の系統はノビレチン高含有系統である「佐系69」の後代系統について予備選抜試験を行っている。そのうち1系統については果皮および果汁中のノビレチン含有量が「佐系69」よりも多いことが明らかになった。	平成31 ～ 令和10 年度	A

機関名：茶業試験場

課題名	研究目的・目標	得られた成果	研究期間	総合判定
大規模茶園管理を可能とするスマート複合管理機の開発	限られた労力でも 10ha 以上の大規模茶園管理を可能とするために、乗用複合管理機が多機能化及びスマート技術による自動化を図る。 - 茶園管理の自動化・無人化による省力化及び労働コストの削減 - 大規模茶園経営体の育成による一経営体（10ha）あたり 300 万円の生産額の増加	- 自動記録システムにおけるデータ送信間隔の改善により適合率を 31%改善した。 - 施肥作業において、資材別の施肥量ダイヤル設定値を明らかにした。また、設定量の違いにより、油圧モーターの回転率が変化し、散布量に影響することが明らかとなった。 - 深耕作業において、通常より長いシャンクを作成し、膨軟化できることを確認した。 - スマート複合管理機で施肥と中耕を同時に行うことで、従来よりも 43%の時間短縮が可能となった。また、裾刈り作業は 62%、深耕作業は 93%短縮され、大幅な労働負荷の低減が図られた。	令和 4 ～ 8 年度	A

機関名：畜産試験場

課題名	研究目的・目標	得られた成果	研究期間	総合判定
肥育牛への高オレイン酸大豆の給与による肉質への改善効果及び給与技術の確立	県内未利用資源である高オレイン酸大豆（規格外品）を給与することにより、牛肉のオレイン酸含有率の向上と、佐賀牛のさらなるブランド力の強化を図る。 高オレイン酸大豆の給与牛の枝肉中に含まれるオレイン酸含有率（去勢 53.2%）を 55%に向上	出荷牛の胸最長筋のアミノ酸、脂肪酸組成、一般成分を分析した結果、給与区の Met で有意に高く（$P<0.01$）、Glu、Val、Leu 及び Phe で高い傾向（$P<0.1$）が確認できた。	令和 4 ～ 8 年度	A

機関名：玄海水産振興センター

課題名	研究目的・目標	得られた成果	研究 期間	総合 判定
水産資源の未来予測高度化事業	水産資源の高精度な将来予測、それに基づく適切な操業を可能とするために、漁業者の実用に耐えるレベルでの将来予測技術開発、高度化を目指す。 ・ 漁場予測 ・ 来遊予測 ・ 資源予測	・ 水産資源の未来予測を基に持続的な漁業が営まれている。	令和 4 ～ 8 年度	A

機関名：有明水産振興センター

課題名	研究目的・目標	得られた成果	研究 期間	総合 判定
ノリ養殖システム確立 調査	ノリの色落ちを軽減するために、干出施肥等のノリだけに栄養塩を吸収させる新たな技術を開発する。 ・ 新たな施肥剤を用いた夜間施肥試験の実施 ・ 短時間浸漬施肥法の開発 ・ 陸上色揚げ試験の実施	・ 夜間干出施肥法・短時間浸漬施肥法：夜間干出施肥法については、気温が高い秋芽網期のみ色揚げ効果を確認した。 ・ 短時間浸漬施肥法については、予備試験で1分浸漬、10分浸漬を試みたが、どちらの試験区も対照区よりも色揚げ効果があることを確認した。 ・ 陸上色揚げ試験（予備試験）では冷凍入庫前のノリ網の色揚げを確認した。	令和3 ～ 7年度	A
ノリ優良品種作出事業	効率的に高水温耐性を持つ品種を作出するため高水温耐性をもつアマノリ類（野生種）とスサビノリ養殖品種との交雑や、野生種の養殖品種化の取り組みを行い、現在の漁場環境に対応したノリ品種を開発する。 ・ 交雑フリー系状体の作出 ・ 野生種（タネガシマアマノリ）の養殖品種化	・ 野生種（ダンシサイ）とスサビノリの交雑については、交雑が認められなかったため、試験を中止した。 ・ 野生種（タネガシマアマノリ）の養殖品種化については、馬渡島に自生するタネガシマアマノリを採取し、フリー系状体の作成及び保存技術は確立した。	令和4 ～ 8年度	A

カキ養殖技術開発事業	大浦地区カキ養殖の生産の安定化とスミノエガキの垂下養殖技術を開発する。 ・ イソギンチャクによる有害生物付着防除手法の開発（垂下式マガキ養殖の安定化） ・ スミノエガキの養殖技術の開発	・ 大浦地区のマガキ養殖については、イソギンチャクによる有害生物の付着防除技術を用いての養殖がすでに行われている。 ・ スミノエガキについては、外国でカキの採苗に用いられる採苗器を用いた採苗技術を確立することで本種稚貝を安定して入手できるようになった。また、カゴを餌が豊富な沖合域に垂下し、約半年で出荷可能なサイズにまで成長させる技術も確立した。	令和 2 ～ 7 年度	A
------------	--	--	-------------------	---

機関名：林業試験場

課題名	研究目的・目標	得られた成果	研究 期間	総合 判定
原木しいたけ栽培の省力化に関する研究	大径原木の加工方法や春切りの有効性等を検証することにより、原木栽培の省力化を図る。 - 加工した大径原木を利用した栽培の有効性の証明 - 春切り原木等による栽培の有効性の証明 - 古ホダへの発生操作の費用対効果資料の作成 - 古ホダの発生操作による品種別の収量予測 - 小径原木を用いた栽培方法の提案	- 大径原木の加工は、収量及び加工の作業効率を考えると、0.5mの短木加工が最も良い。 - 春切り原木を用いた栽培は、1年目の収量は秋季伐採に劣るが、4年目までの総収量の差は認められなかった。 - 古ホダへの発生操作の有効性は、認められなかったが、品質によって収量に差がみられた。 - 品種間の差が顕著であり、新たに導入した品種の2年目以降の生産量を把握する必要性が生じた。 - 小径原木の場合、ホダ木の寿命が2年程度に短くなる可能性があり、ホダ木1本あたりの連年の総収量を把握する必要性が生じた。	令和1 ～ 9年度	A